

地域住民による落語の会立ち上げ

平成19年4月

2人で立ち上げた落語の会「ちりとて落語の会」

ドラマ「ちりとてちん」はあくまで看板

小さく載った地域住民への参加呼びかけ記事

夏から秋にかけてプロのはなし家による落語を企画している「落語公演実行委員会」が、落語に興味のある参加メンバーを募集している。

小浜市を舞台に今年秋から放送されるNHKの連続テレビ小説「ちりとてちん」が、若狭塗著（ばし）職人の娘が

落語に興味ある人参加して

小浜で12日、公演実行委の会合

大阪に出てはなし家を目指す物語であることから、若狭地方の人に落語の魅力を知ってもらいたいと市民有志が実行委員会を立ち上げた。

12日午後2時から、市文化会館で第1回の会合を開く。参加申し込みは、市文化会館＝電0770(53)1111＝へ。（白山泉）

→それを見て来たのは1人

予算ゼロ

あるのは気持ちと人だけ

企画会社を通さず落語家と直接交渉
高座やチラシなど全て手作り

今まで年 1 回の落語会が
→ 1 年間で 2 4 回



お茶子クイーンコンテスト予選開催
本選でも準グランプリを輩出

現在のスタッフ 1 7 名 応援会員 2 5 名

2 0 年度も 4 月から 1 2 月までで 2 5 回の落語会を開催予定

イメージを現実へ

現実にドラマのロケ現場へ来てみて幻滅すること
→ドラマとロケ地が全然違う！よくあること

二次的なものをそのまま現実のまちにおこす
→それだけではダメ

表面をなぞるだけでは本当の魅力は伝わりにくい

そっくりそのままドラマの世界観を作り出すことは不可能
ブームの終焉とともに廃れてしまうおそれも

ドラマを読み解く力

地域が元々持っていた文化・魅力

→ドラマなど二次的表現へ変換

ドラマの風景がそっくりそのままあることよりも、風景は違えど、その土地に来て感じるイメージや体験が一致するものであれば満足できる

脳内に構築されるイメージ

→体験を伴う現実へ再変換

「人は食事のとき半分は脳で食べる」という論がある

過去の経験や得たイメージが実際の味覚以上に「味」を左右する

今後目指すもの

小浜の魅力とは何か

北陸と関西の文化が融合した町

北陸の伝統文化を守る気持ちと、関西の華やかさを愛する気持ち
二つが入り交じって若狭という独特の風土を作っている



昔からの町屋や茶屋、寺院、蔵が並ぶ町並み



そこで体験できる「ちりとてちん」の世界を目指す

- ・ 伝統と華を併せ持つ落語

定期的な寄席の開催、常設の寄席・演芸小屋構想

- ・ 職人が守り抜いてきた伝統文化

「若狭塗り箸」「若狭和紙」「郷土料理」などを実際に体験